

鏡二題

長谷川時雨

青空文庫

暗い鏡

鏡といふものをちやんと見るやうになつたのは、十八——九の年頃だつたと思ひます。その前だとして見ましたが、鏡にうつる自分を——まだそのころだとして顔だけです——見たといへませう。十七位の時分は寧ろ姿全體にうつるもの——姿見鏡すがたみでなくつても、硝子戸なんぞでも氣まりが悪かつたので見ないふりをして、その癖誰も見るものがないとしげしげと見詰めたものです。どうも體のどこもが丸くなるのが——尻ししきなどが極立きはだつて格好が悪くなつて厭でした。

鏡といへば、子供のころ家に新舊二様の鏡があつて、どれを見ても心を暗くしたのを覚えてゐます。八十八の祖母は舊式でしたから箆筒のある部屋へ障子屏風をたてめぐらしてその中に鏡臺が飾つてあつて、鏡は丸い銅かねの鏡——夏になるとよく磨師とぎしに磨かせてゐましたが、とにかく黒ずんだ、沈んだ顔が鏡の底の底の方に生氣なくうつるのでした。おまけに部屋が藏どほづくりでしたから、それに窓の青葉などに白い花でもついてゐる時は、妙けに氣遠いといふ心持ちがして、美しくいへば、流れに沈んだ晝の月を見るやうだとか、又は深

い井戸の底にうつつた顔のやうだとか形容も出来ませうが、その場合は狐つきぢやないかと自分の顔を悲しい^{こは}凄いやうに眺めて、嫌な氣持ちがしたものでした。どうもあの銅^{かね}の鏡は髪の色でもなんでも生^{いきいき}々としたところがうつらないで陰氣です。そのかはりにまた、そのころの西洋鏡——硝子のときならば粗製品で、どれにうつして見ても顔が違つてゐるのです。顔が半分歪んでゐたり、しやくれて見えたり、滑稽な泣きつ面をしたり、ほんとに嫌になつてしまふのが多かつたので、そんなものは見たくないやうな氣がして——子供だからそれほど分^{はつきり}明不快^{いや}だとは思はなかつたかもしれないが、まあそんな覺えがありません。

姿見は中々よく見ました。疊半分以上の、そのころのものではよい品^{しな}があつたので、それに息をかけて拭きながら種^{いろく}々の表情をやりました。だが子供心に、妙なへだてをつけたもので、鏡は顔を見るものとしてで、姿^{すがた}見の前にくると別な氣分です。といふのは、あたしは踊りが大好きだつたので、お師匠さんなしの自由な踊りの稽古がたのしめたのです。いはばまあ、姿見が師匠なのでした。變なかたちをすると、「拙^{まづ}い」と叫ぶ、實に生^きまじめなもので、その聲は自分の聲とはしないのでした。

そこで、おとなになつてからのあたしは鏡にこすい對しようをすることを覺えました。

一個の鏡を二ツに役にたてる。ある折はあらゆる自分の缺點あさがしをやり、醜うさのかがりを探りだします。それは顔面といふだけではなく、心にまで觸れてゐます。もつとも多く鏡の前で考へます、自分自身の悩みについて——それは深刻なものです。いつもいつもがさうであるとはいひませんが、はじめから自分を睨めるやうにむかふ時もあるれば、ふと髪を解く手も忘れて、ポーツとなつてゐる時もあります。前の方の時は悪どく現實的なをりです、後の折はやや空想的です。前の場合には眼は残酷な秋しゅう官わんです、なさけ用捨もなく毛筋ほどのおもねりありません、氣孔けあなひとつにも泣きたいほどの厭いとさがあつて、とてもたまらない不快いやな存在です。ぶちこはしてしまふことも出来ない粗製濫造品、自分だからといふので生かすつづけようとする矛盾さ——まあそんな疝癩ぜんらんです。

だが、またある折は化ばけたつもりでだまかしておいて貰もらひます。それではづかしげもなく人ひと中なかへも出ます。化粧といふのは他目ひとめを賺ごすのではなく自分の心を化ひしなだめるのです。具合のいいことに化けようとしてゐる心は、都合よく賺だまされることに努力します。うぬぼれない自己満足——自分をだましてゐればよいで、なるべく手早く、痛いところに觸れない速力で髪も結ひます、化粧もします。

あたしは他ひと人に髪を結つてもらふのが大厭いとひです。ひとつは潔癖けつからもくるのですが、

凝と鏡を見詰めてゐる間が長くて耐へられなくなります。何時も美しいなあと思へて鏡にむかつたらば、鏡は愛らしくもあり、親しみもありませうが——我影を見る親しみはもちながら、なんとなく怖い氣がします。それは年齢としが更ふけてゆくといふ戦そのきばかりではありません。それらのことは面影に、鏡に見出すより早く氣づいて、却て驚いて鏡を見直すくらゐデリカなものです。

（「婦人公論」昭和四年）

女と鏡

ある折は、水をのんだコップにうつる生々いきした愉快な顔——切子きりこの壺に種々な角度からうつるのも面白い。さし出された給仕盆おぼんにうつることもあり、水面みづにうつして妙な顔をして見ることもある。食べものを運ぶホークに、二本の筋のある断片的な鼻と口とがうつり、齒こが光ることがある。それより面白いのは小さな匙しやくに、透明な液體とともに掬しやくひあげた小人の自分の顔。どれもあんまり美しいものではない。しかし、ものを書きつづけた夜の顔びとが、朝の光りに、机や窓硝子にうつつた時のあじきなさは、シヨウウインドに突然くたび

れた全身を映照しだされたをりの物ものはぢ恥と匹敵する。

私もよい鏡を持ちたいと思つた事もあつたが、それは趣味の時もあり、心の守りといふふう
に思つたをりもある。今日の考へでは、脂粉のいらぬ年齢としになつても、正しくたゞ恥ない
日日を送るために入用だと思つてゐる。我心の正邪を、はつきりと、心の窓の眼から覗く
ことが出来るのは、凡人には鏡が手近だから——（「婦人公論」昭和十一年四月號）

青空文庫情報

底本：「桃」中央公論社

1939（昭和14）年2月10日発行

初出：暗い鏡「婦人公論」

1929（昭和4）年

女と鏡「婦人公論」

1936（昭和11）年4月号

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2009年1月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鏡二題

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>